

漁業体験を中心としたブルーツーリズムの取組

新庄漁業協同組合
橋 智史

1. 地域の概要

私たちが住んでいる田辺市は、和歌山県南部に位置しており、所属している新庄漁業協同組合は、田辺湾の湾奥にある。太平洋に面した当地域周辺の海域は、黒潮の影響を受け、豊かな自然の中で、古くからさまざまな漁業が営まれている。また、鳥の巣半島の先端付近には、組合のカキ養殖場と養殖筏を利用した鳥の巣釣り場があり、さらにブルーツーリズムの活動拠点となる漁業等体験・交流施設が併設されている（図1）。

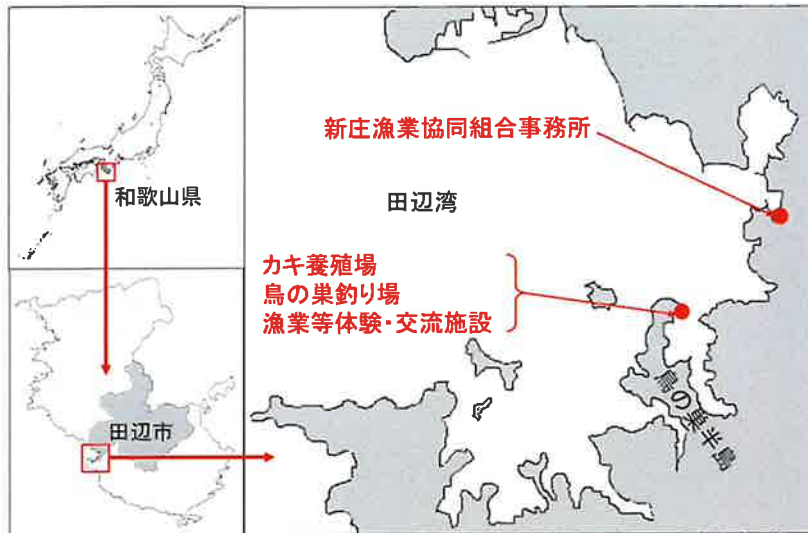


図1 活動実施場所

2. 漁業の概要

新庄漁業協同組合の組合員数は、令和6年度末で正組合員が28人、准組合員が286人である。主な漁業としては、地先でマガキガイ、ヒジキ、ヒロメなどを漁獲する採介藻をはじめ、刺し網、一本釣りなどが営まれている。

3. 研究グループの組織と運営

新庄漁業協同組合は、昭和24年12月に新庄村にある各字の漁業会が合併して設立された。かつては、真珠養殖が盛んであったが、徐々に衰退し、現在はカキ養殖が主体となっている。組合の主な事業は、漁業自営事業としてマガキ、イワガキなどの養殖やサンゴ漁業を行うとともに、利用事業として釣り場を運営しているほか、指導事業としてヒジキやヒロメの藻場造成、イセエビやタイワンガザミの種苗放流などを行っている。

4. 研究・実践活動取り組み課題選定の動機

新庄漁業協同組合の正組合員数の推移を見ると、平成11年には94人であったが、直近の令和6年では28人と、25年間で約1/3程度まで減少している（図2）。また、正組合員の平均年齢は75歳と高くなっており、40歳未満の者はおらず、60歳以上が約9割を占めている。

このように組合員の減少・高齢化が進行し、漁村の活力は低下しており、この状況が続けば、組合存続の危機になるため、漁村の活性化及び担い手の確保が喫緊の課題となっている。

こうした中、国においては、漁村が有するさまざまな地域資源を活用した「海業」を推進しており、これにより地域の所得向上と雇用機会の確保を図ることとしている。

新庄地域においては、マガキやイワガキ等の直売や釣り場の運営など、従来から海業に取り組んできたところであるが、これらに加えて、漁業体験を中心としたブルーツーリズムを創出したいと考えている。新庄の豊かな自然や地域資源を活用し、こうした海業の取組を推進することにより、漁業や漁村地域の魅力を発信し、漁村の活性化や雇用の創出による担い手の確保に繋げていく。

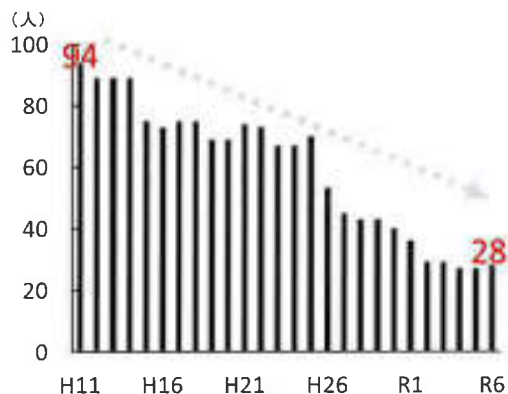


図2 新庄漁業協同組合正組合員数
(業務報告書 [数値は事業年度末])

5. 研究・実践活動状況および成果（または効果）

（1）漁業等体験・交流施設の整備

新庄地域の海業の取組を推進するため、令和3年度に、和歌山県のブルーツーリズム推進事業を活用して漁業等体験・交流施設を整備した（写真1）。施設では、マガキやイワガキ等の直売や鳥の巣釣り場の総合案内を行っている。また、現在、田辺市、田辺観光協会及び民間事業者と連携しながら、漁業体験の商品化を目指してモニターツアーを実施しており、周辺地域でのブルーツーリズムの活動拠点として、この施設が重要な役割を果たしている。



写真1 漁業等体験・交流施設

(2) 漁業体験メニューの開発

今回、ブルーーツーリズムを創出するため、4種類の漁業体験を試行した。漁船を使用する体験としてカニ網漁と棒打網漁を、漁船を使用しない体験として建干網漁と養殖マガキの出荷作業をそれぞれ行った(図3)。

カニ網漁は、新庄地域で主にタイワンガザミを対象として行われている固定式刺し網漁業である(写真2)。参加者には、前日に漁場で仕掛けておいた網を揚げるところから行ってもらい、水揚げ後に漁獲物を網から外して、最後に網を片付けるところまで体験してもらう。多く漁獲されるのはタイワンガザミだが、他にイセエビや魚が獲れることもある。

次に、棒打網漁は、磯の近くに網を張り、ロープを取り付けた棒を海へ投げ入れたり、棒で直接、海面を叩いたりすることで、魚を威嚇して網の方へ追い出し漁獲する刺し網漁業である(写真3)。参加者には、網入れした後の棒打ち、網揚げ、そして漁獲物を網から外す体験をしてもらう。棒打網漁は、当日、その場で網を張り、すぐに揚げるので、カニ網漁に比べて漁獲するのが難しいところがある。

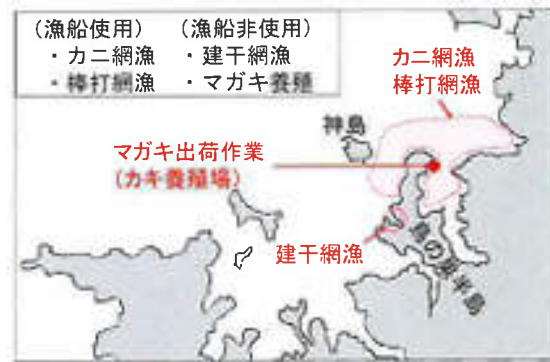


図3 漁業体験実施場所



写真2 カニ網漁



写真3 棒打網漁

カニ網漁や棒打網漁のように、漁船を使用した体験では、漁場へ行き来する間も、クルージングを楽しむことができる。普段、あまり船に乗ることのない一般の方が、このような小さな船に乗り、海面に近い目線で海の上を走ることは貴重な体験になるだろう。さらに、漁場の近くには、国の史跡名勝天然記念物に指定されている神島があり、すばらしい景観を海から眺めることができる(写真4)。



写真4 漁船クルージング

体験が昼をまたぐ場合は、途中で昼休憩をとることになる。その際、昼食は基本的に参加者が各自で持ってくるようお願いしているが、昼食前に漁業体験で獲れた魚のさばき方を実演して、実際に試食を行った。普段、なかなか口にすることのないアイゴの刺身は、臭いがなくおいしいと好評であった。また、漁協が養殖しているマガキや地域特産物であるヒロメについても試食を行い、地元水産物をPRするいい機会となった(写真5)。



写真5 試食

建干網漁は、潮の干満差を利用し、満潮時にあらかじめ湾を網で仕切り、潮が引いて取り残された魚などを、たも網等で採捕する漁法である(写真6)。新庄地域では、潮の干満差を利用して磯場で行う「おきあがり漁」と呼ばれる漁法があったが、それを少しアレンジして遠浅の砂浜で行うことで、体験中に漁船を使わず一度に大勢の方が体験することができる。モニターツアーでは、広い駐車場のある少し離れた場所に集合し、そこから徒歩で海岸沿いの景色を楽しみながら漁場へ移動した。漁場の手前には休憩場所としてテントを設営し、湾口に設置した仕切網までのエリアで体験を実施した。参加者は、足元を水につけながら、取り残された魚を追いかけて、たも網を使って採捕したり、網に掛かっている魚やカニを外したりする。自然の中で、直接、魚などを獲る醍醐味を味わうことができ、子供たちは楽しそうに走り回っていた。当日は、予想以上に魚などが入っており、大きなコショウダイをはじめ、クロダイやヘダイ、アイゴ、タイワンガザミなどが漁獲された。漁獲物は、参加者の皆さんで分けて持って帰ってもらったが、量が多く、普段、家で魚をさばくことがない方には負担になる面も考えられるため、今後は、魚の下処理や、その場でバーベキューをして食べるなどのサービスの提供を検討していく必要がある。また、エイやアイゴなど毒のある魚も入るので、建干網漁を安全に行うために、漁場内の事前確認や適切な服装をすることが重要になる。



写真6 建干網漁

鳥の巣のカキ養殖場の筏では、垂下式によりマガキを養殖しており、出荷する際の作業体験を行うことができる。参加者には、水揚げしたマガキを分解し、付着物を除去して、洗浄する作業を体験してもらおう(写真7)。普段スーパー等で目にするきれいな状態になるまではかなり手間がかかっており、実際に作業を行うことで、生産者の苦労を分かって



写真7 マガキ出荷作業

いただける機会となる。洗浄したマガキは、紫外線殺菌海水で浄化した後、やっと出荷することができる。また、昨年の2月からは、バスケットを用いた3倍体マガキのシングルシード方式による養殖の試験を開始しており、今後、身が痩せて本来出荷できなくなる夏場での販売や垂下式とは違った形での漁業体験を行うことができるようになるかもしれない。

(3) その他の体験メニューの開発

漁業体験以外に、海に関連した体験を組み合わせてモニターツアーを実施した。鳥の巣半島の周辺は、吉野熊野国立公園内であるため、豊かな生態系が残されている。組合としても、新庄地域の里海を守るため、民間企業と連携し、藻場造成など生物多様性の保全を図る取組を積極的に行っており、昨年3月には「南紀田辺 新庄の海」として、環境省の自然共生サイトに認定された。このような素晴らしい環境にある磯場を案内しながら、参加者にはいろいろな生き物などを観察し、自然との触れ合いを楽しんでもらう。(写真8)。

また、色とりどりの海藻やさまざまな貝類から好きなものを選んで作品をつくる海藻押し葉づくり(写真9)や貝殻クラフトワーク(写真10)のほか、イカの解剖(写真11)として、各部位の解説を聞きながら、丸のスルメイカを参加者が自ら解剖する体験を行った。

こうした漁業体験以外の体験を追加することで、内容の多様化を図るとともに、漁業体験を実施できないような天候不良時に実施可能なメニューとして活用することもできる。



写真8 磯場観察会



写真9 海藻押し葉づくり



写真10 貝殻クラフトワーク



写真11 イカの解剖

6. 波及効果

モニターツアーの参加者に対して新庄地域の漁村の魅力をアピールすることができた。今後、ブルーツーリズムを商品化し、漁村を訪れる人が増えることにより、地域の賑わいが創出され、漁村が活性化することが期待される。

また、漁業者側にとっても、観光業など異業種との交流により人脈や見識が広がるとともに、消費者に直接漁業の現場に触れてもらうことで、漁業という仕事への理解が得られるほか、水産物をPRする場としても活用できる。

さらに、若い世代に対して漁業の魅力を発信することで、将来の担い手の確保にも繋げることができる。

7. 今後の課題や計画と問題点

4種類の漁業体験をメインとしたモニターツアーを実施した結果、参加者からは、非日常的な体験をたくさんすることができ、満足したとの意見が多く得られた。モニターツアーでは、毎回、参加者にアンケートをとり、その結果をもとに関係者が集まって改善点などを協議している。漁業体験に対して好意的な意見が多いことから、商品化の可能性を感じる一方、参加者の求めるサービスへの対応や採算の合う価格設定など検討すべき課題もある。今後、これまでモニターツアーで試行したメニューをブラッシュアップし、漁業体験を商品化してブルーツーリズムの取組を加速させることで、新庄地域における海業をさらに推進していきたいと考えている。